



## 同窓会だより

昭和49年外科レジデント  
須磨ハートクリニック  
院長 須磨 久善

### 「CHALLENGING SPIRIT」

昭和48年、今から40年ほど前のこと、私は大阪医科大学最終学年の夏をバスケットボール部の仲間たちと医学部全国大会での優勝を祝って過ごしていた。卒後の進路の選択に迷いはなかった。医学生としての六年間に様々な専門領域を目の当たりにして何が自分にとって最も魅力的なのかを何度も自問したあげく、卒業後は母校の胸部



外科に入局して心臓外科を学ぼうと決めていた。動きの弱った心臓を手術で劇的に蘇らせる、そんな外科医になれるものならなってみたかった。私が医学部を受験する直前に史上初の心臓移植が南アフリカで成功し、そのニュースを見た十七歳の私の心は鋭い衝撃を受けた。「心臓を手術する」というメッセージが頭の中に残ったまま医学生となり、解剖の実習では心臓を誰よりも長い時間をかけて眺め、図書室ではその当時米国で開発された冠動脈バイパス手術の論文を目の当たりにして「この手術が出来るようになりたい」と強く思った。ところが、進む道をそこまで確信していた私の心にある日突然変化が生じた。「本当にこのまま母校に残っていいのか。もっと広い世界を見なくていいのか？」考え始めるともう止まらない。生まれ育った関西地方で一生を終えるなんてもったいない。それに心臓のことしか知らない医者なんてありえない。当時の卒業教育は、大学に残ればその医局以外の科での研修はほとんど表面的なものでしかなかった。まずは東京に行ってみよう、そして一般外科を中心とした臨床の基礎をしっかりと教育してくれる病院で研修を受けよう。翌週には虎の門病院の外科レジデントの採用試験の願書を手にしていた。

昭和49年春、幸運にも採用となった私は、虎の門病院のレジデント・クォーターに住み込むことになる。病院最上階の結核病棟近くにあったレジデント部屋の窓のまん前には移転前の米国大使館に星条旗がたなびいていた。当時の前期外科レジデント課程四年間のチーフレジデントは中澤英樹・西陰三郎・江崎昌俊先生、三年目が高木啓吾・福地晋治・竹下公矢先生、すぐ上には川村武・田中純次・角田康典先生、そして同期生には大原務・遠藤勝幸・若桑正一がいた。学生時代の合宿に戻ったような生活が始まり、毎日が発見と学習の日々だった。

当時の虎の門病院に心臓外科はなかったが、実はそれでも私は将来必ず心臓外科医になろうと決めていた。志を遂げる前にすべての医療の基礎を学び、今しかできない一期一会の気持ちで各科をローテーションしようと思った。まず初めは梶ヶ谷の分院に半年間住みこんで整形外科の河端・南条先生のもとで関節リウマチや椎間板ヘルニアの手術に明け暮れた。私一人で受け持った入院患者は常時40～50人で毎日10人ほどが入退院する。早朝に病棟を駆け足で廻って処置を済ませ、午前手術に入って手術に没頭し、終われば新しく入院した患者の問診と指示を出す。午後手術が始まるまでの

時間はいつも10分を切っていた。食堂のおばさん達はよくわかっている、素早く大盛りのおかずとお吸い物に漬物をトレイに並べる。私はそれを丼二杯のご飯と共に平らげて再び手術室に駆けこむ。そんな嵐の如き整形外科を終えると次は池永先生の一般消化器外科だった。まだ医学部を卒業したばかりの私に池永先生ははにっこりと微笑んで「どうぞこの患者さんの胆摘、おやりください」とさりと言った。自分が術者となるのは数年先と思っていた私は身震いしたが、その手術を無事に終えたあとの達成感は今も忘れることが出来ない。分院での半年を終えて虎ノ門の本院に戻り麻酔科に配属されると、井上三郎先生が手術室に入ってきてギョロリとした目で「おい、さっさと麻酔かけろ！」とだけ言って部屋を出て行く。かけろといわれてもどうやるかくらい教えてよ、と心の中で叫んでも部屋には私と看護師と患者さんしかいない。大学で習ったことを思い出しながら患者を眠らせ、気管内挿管をする。背中は汗でびっしょりだった。「おー、出来るじゃねーか」と背後からあの声が聞こえた。そろりと部屋に戻って後ろから見ていたのだ。

そんな冷や汗ものの臨床研修が始まり、次第に病院での仕事に慣れていった。自由選択のローテーションでは循環器内科を選び、クリーブランドクリニック直伝の冠動脈造影法を日本で先頭を切って行っておられた山口洋先生から直接学んだ。スタッフの鷹津先生や石村先生から教えられた虚血性心疾患の診断と治療の知識が、後に心臓外科に進んだ時にどれだけ役に立ったか計り知れない。外科医の心構えと手術の基本を教えていただいたのは豊田忠之先生だった。当時医学教育部の部長であり内分泌血管外科の部長だった豊田先生は外科医のあり方をさりげなく、しかし厳しく私の前で示された。そして私のライフワークとなる冠動脈バイパス手術の基本である血管の扱い方を初めて教えて下さったのも豊田先生だった。一方、消化管の手術は秋山洋先生・檜山護先生らが見事な手術を眼の前で連日披露して下さいました。更に驚いたことに、胃癌の手術をまだ三年目の私に何十例も執刀させて下さいました。十年後、私が心臓外科医として独り立ちして胃大網動脈を使った冠動脈バイパス手術を世界に先駆けて成功させることが出来たのは、虎の門病院でのこれらの経験があったからに他ならない。

虎の門病院での四年間の研修を終えて、私は初心を貫いて心臓外科の道へ進んだ。順天堂・大阪医大・米国ユタ大学で研鑽を積み、三井記念病院心臓外科部長を経てイタリアのローマ・カトリック大学心臓外科教授を務め、帰国後に湘南鎌倉総合病院で日本初のバチスタ手術に挑んだ。その後、最先端の設備を備えた欧米に比肩する心臓専門病院の葉山ハートセンターを立ち上げ、そこに子供たちを招いて病院見学会を開始した。既に私と出逢った小中学生や高校生は三千人を超える。その中から多くの子供たちが医師を目指し医学部に入学した。幾つもの大学から講演を依頼されて出かけて行くたびに、「先生の病院を見学して、先生の手術を見て医者になることに決めたいです」と言って駆け寄って来る学生と出逢う。本当に医者冥利に尽きる思いだ。

虎の門病院で医者としての第一歩を踏み出してから数々の挑戦を繰り返してきた。挑む心なくしては、外科医としての成長そして医学の進歩は成しえないと信じるからだ。そのChallenging Spiritを学んだのは虎の門病院でのレジデント時代であることに間違いない。